

社会環境システム研究分野(総合)

委員会からの主要意見

現状についての評価・質問等

- 政策立案に関連深いテーマを戦略的に選び、外部資金の獲得も行うなど、組織的な取組が評価できる。また、テーマは多岐に渡り、温暖化、水域保全、生態系サービス、持続可能社会、廃棄物、ライフスタイルなど、国立環境研究所が関わる研究のかなりの部分をカバーしている。[年度]
- 査読付論文の発表と国外の口頭発表がそれぞれ 100 件を超えており、成果の発信は十分になされている。[年度]
- 国内・国際環境問題の政策提言への主力分野として期待ができる。[年度]

今後への期待など

- 今後、約束草案の議論が深まるにつれて、このグループの重要性が益々高まることは確実であるが、後継者がしっかりと育っているかどうか若干心配である。AIM モデルの若手トレーニングを、このグループの若手が務めるといったことができているのだろうか。[年度]
- 緊急対応的な知見の発出も期待したいところ。たとえば、2013年度の温室効果排出量が1990年以降最大の排出量であったことへの緊急対応シナリオが描けるかといった問いへのタイムリーな発信が可能かどうかは、是非検討してほしい。[見込み]
- リスク共生学、すなわち安心・安全で持続可能な社会の実現を阻害する健康、環境・生態、資源・エネルギーをはじめとする多様なリスクを的確に抽出し、その大きさの解析・評価結果に基づいてステークホルダーや社会とコミュニケーションしながら、合理的にリスクを低減するための対策・施策に繋げる学問(研究)分野の充実に向けた実践的取組(の強化)が期待される。[見込み]

主要意見に対する国環研の考え方

- ① ご指摘をありがとうございます。生物センターとの連携研究グループを26年度に開始するなど所内の各研究センターとの連携を進めており、また今後も一層進めてまいります。5か年中期計画の成果が結実する時期にあることが研究成果の増加につながったとも考えられますが、来年度も中期計画の最終年度という節目であり、引き続き成果の出力に努めてまいります。
- ② センターの研究分野が多岐にわたるなかで、重点的な研究分野については各分野での知識の再生産が可能になる研究員構成を長期にわたって維持できるように人材育成を心がけています。ご指摘いただいた、AIM モデルのトレーニングは国際的な次の研究の担い手を育成することを目的として行っておりますが、これらの人材との交流を進めるとともに、トレーニングの講師を若手の日本人研究者が務めることで知識の高度化を通じて、自身の研究能力向上につなぐ効果が出ています。また、連携大学院での教育機会を若手研究者が務めるなどセンターとしての若手研究者の育成としての活用を図っています。組織の定員に制限がある中で、多くの作業を任期のある契約職員や外注に委ねており、組織として今後も政策ニーズに応じ続けるためには、優秀な人材の確保を含めた努力が必要と認識しています。
- ③ 環境省等関係機関の要請に対して、中長期の新たな目標を設定するなど緊急的な要請に対して、AIM モデルを用いたシナリオ算定について引き続き意欲的に対応してまいります。福島における復興シナリオや首都圏の技術戦略など新たな地域単位の対応シナリオについても情報発信できる研究取り組みを検討してまいります。
- ④ 低炭素、資源循環、生活環境改善などの定量化について方法論が確立されている環境機能については解析手法の精度とともにその利用率を高めることによって、社会のステークホルダーの政策立案、事業計画

に反映するための方法論の開発を通じて、将来世代を含む環境負荷・リスクの低減を社会に取り込む社会実装研究を進めてまいります。いろいろなスケールでの環境政策への反映を通じて理論と方法論の開発と検証を進めるため、主体の要請に応じた研究境界の見直しが不可避になることはご指摘の通りですが、解析・評価のできる環境機能に重点を置きつつ、研究アプローチとしての一般化を図りたいと考えております。